

たつとりあとを……

医学部学生 平尾 幸弘 山口 朋子
 小山 誠 原野 晴美
 沢田 史恵 上田 修

入学したのはついこの間のことのように思えるのに、もう卒業についての所感を書くような時期になってしまった。この4年間について自分は何のために大学へ来たのかを考えるが答えは見つからない。わかっているのは高校までの受け身の姿勢と違い、大学では自分から何かしなければなんにもできないということだ。失敗してもいいと思う。大学生なんだから、若いんだから。今年卒業する人に、そして入学してくる人に言いたい。challenge spirit を忘れないでほしい。(平尾)

「何学部ですか」と聞かれるたびに、つい答えにつまってしまう。なぜなら私は、医学部総合薬学科だからだ。同窓会などで聞かれると、「医学部だよ」と言っておいてから「薬科だけ」と付け加えてしまう。病院などでは最初から「薬科です」と答えるしかない。アルバイトなどで医学部募集にはお呼びじゃないようで、医学部以外では除かれている気分になるこの薬科で、4年間学んできたが、医学科の先生の講義などもあり、自分にとっては、それなりに有意義であったと思う今日このごろです。(山口)

自分の城が持てたようであれしからた独り暮らしももう4年たった。今まで親に任せていたことを自分でやらなければならなくなった。でも、一番つらかったのが、やはり病気になったときだ。2年生の夏、腹痛に襲われた。一時は和らいだが、その日の夜中、再び痛みだした。病院に電話したが、最初の病院では断られ、次で診てもらえることになった。結局、2、3日で回復したが、このときに独り暮らしのつらさと友達のありがたさが身にしみたのであった。(小山)

平和公園に夜桜見物に行った時、「8月が近づくと、広島にいることを実感する。」と言った友達がいた。そして私はその言葉に共感したわけではないけれど、その年の8月、平和祈念式典に初めて参加した。式典はテレビ中継などで見るよりもずっと晴れがましく、世界の誰もが平和を望んでいるかのような錯覚に陥ってしまった。それから一年半後、中東で世界を揺るがすような戦争が始まり、私は広島で平和を願うということがどうしたことなのかわからなくなってしまった。そしてこのまま広島を離れることが、平和に背を向けることのような気がしてならない。(原野)

私は旅が好きです。たった4年間の大学生活でしたが、この短い間に、クラブの対外試合、友人との小旅行も含めると、ほんとうにたくさん土地に行き、いろいろな人に出会うことができました。旅に出ると、自由で毎日が新鮮です。そして、時の大切さ、人のあたたかさを知り、自分を見つめ直すこともできます。とにかく楽しいのです。この楽しさを教えてくれた友人や両親に感謝します。(沢田)

研究は地味であり泥臭いもので、憧れていた華やかさなどみじんも感じさせないものであった。しかし、そこから導かれる科学の真理は研究者にとって何にも替え難いほど、光り輝くものである。まだ見ぬその魅力をおぼろげながらも感じさせ、これを求める道をひらいてくれた大学生時代。この数年間は、知識や経験だけでなく理想という財産を与えてくれた。また、すばらしい先生方や先輩方そして友人との出会いの場をもたらした。卒業を控えたこの感概を胸にしまう。(上田)